



episode 16 「愚り」と「愚ら」

投稿者 宮本 ちあき さま(三重県)



『ぐりとぐら』
中川李枝子 作
大村百合子 絵
福音館書店 1967年

たった一度だけ、劇の主演をやったことがある。

保育園のお楽しみ会で『ぐりとぐら』のお芝居をやることになり、なぜか私が、「ぐり」の役に抜擢されてしまったのだ。

私はさっそく近所の公園へ行くと、仲良しの幼なじみ達に劇のことを伝えた。

「主演をやらされることになっちゃってさ…」

私は、手にした絵本をこれ見よがしに見せながら、いかにも面倒そうに呟いてみせた。

「まあ大した役じゃないし。恥ずかしいから、みんな観に来なくていいよ。」

ところが当日、園へ行ってみると、先生方が慌てた様子で駆けずり回っていた。

劇に使う小道具が、何処にも見当たらないというのだ。理由については未だに分からない。

廃品業者がゴミと間違えて、持って行ってしまったのだろうか。

仕方なく先生方は急ぎょ、有り合わせの物で小道具を作り始めた。

ぐりとぐらが森で見つける大きな卵は、園児が昼寝の時に使う、使い古しの毛布を丸めて作られた。

カステラを焼く大きなフライパンは、黒いゴミ袋を丸く切ったものが使われ、

焼きあがったカステラを森の仲間たちに配るシーンでは、カステラの代わりにボロ雑巾が配られることとなった。

しかし、私が何より恥ずかしかったのは、体操着の胸のところに貼られた、「ぐり」と書かれた白い紙だった。

ネズミのお面の代わりに付けられたのだが、まるで防犯訓練のときの犯人役みたいなのだ。

舞台に出た途端、いちばん前で観ていた幼なじみ達は、指をさして笑い始めた。

そして、舞台が終わるまで皆ずっと、顔を真っ赤にして笑い転げていたのだ。

ぐら役の女の子とは、のちに高校で再会することとなった。

劇のことを懐かしく話していると、傍らにいた別の友達から、「ぐりとぐらって、どんな話？」と訊ねられた。

ぐら役の子はしばらく考えたあと、こう答えた。

「…確か、何かやらかした二人が罰で、森でゴミ拾いと、お掃除をさせられる話。」

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2023」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



60周年おめでとう

1963年に誕生した双子の野ねずみ「ぐりとぐら」は、昨年2023年、60才になりました。この60年で、あらゆる文化・生活環境が目覚ましい発展を遂げましたが、『ぐりとぐら』は、昭和40年代の子どもたちの心をつかんだように、平成生まれの子どもたちの心も、令和生まれの子どもたちの心も、変わらずにガッツリとつかんでいるのです。

初登場は、福音館書店の月刊雑誌「こどものとも」1963年12月号で、1967年に単行本となったものが現在に続く絵本です。およそ60年の間に、新しく生まれた絵本は膨大ですが、一度の印刷、発売でそのまま消えていく絵本も数えきれないほどあります。『ぐりとぐら』は、絵本が刊行された1967年から世代を超えて愛され、増刷され続け、2024年現在の発行部数は567万部に達するのです。(株)トーハン「ミリオンぶっく2024」2024年3月19日リリース



敏腕編集者が生んだ絵本『ぐりとぐら』

この双子の野ねずみが「子どもに喜ばれ、一生、記憶のどこかに留めておくほどの人気ものになる」ことを、制作前の1963年に予感した人物がいます。それは当時、福音館書店編集者だった松居直氏です。

月刊誌「母の友」1963年6月号に掲載された、中川李枝子氏の幼年童話「たまご」を読んでいた松居氏の脳裏には、どんどん絵本の場面が出来上がっていき、読み終わったときには、一冊の絵本が頭の中に描きあげられたというのです。つまり、『ぐりとぐら』は、童話「たまご」を松居氏が場面割りして生まれた絵本というわけです。

「たまご」の挿絵を描いたのは、中川氏の妹で、まだ素人だった大村百合子(当時)氏です。松居氏は、百合子氏の絵を「やさしさと暖か味のある、少女の落書きの世界で、自然におとなと子どもがふっと手をつなぐ、あの気もちの世界」と評し、もっともふさわしいとして、中川・大村コンビによる絵本を手がけたのです。



作家・画家・編集者の最強タッグ

中川・大村コンビは、『ぐりとぐら』を出版する一年前に刊行した童話『いやいやえん』で、はじめての姉妹共作に取り組んだばかりでした。

中川李枝子氏が保母(当時)として見てきた子どもの世界が形象化されていて、作者のものの見方、考え方が現れていることを読み取った松居氏は、その稀にみる豊かで理知的な空想の世界に魅せられるのです。そこで「子どもの本」の世界がようやく見えるようになり、編集者生活に重要な意味をもつ作品となった」と、著書『絵本とは何か』で述べています。

挿絵を描いた百合子氏は当時、高校生で、『いやいやえん』がデビュー作です。そして『ぐりとぐら』で、はじめての色刷り絵本に取り組んだのは、大学生のときでした。松居氏は、子どもたちへの“ヒミツのサイン”を企んで、百合子氏に『いやいやえん』の登場人物を描き入れてもらう仕事は楽しかったと振り返っています。



いつでも会える

こうして完成した『ぐりとぐら』をみた松居氏は、「子どもが喜ぶ様がありありと目に浮かんだ」と記しています。「不安は微塵もなく、子どもが入っていけるぞ、喜ぶぞ、というわくわくするような喜びがあった」というのです。松居氏が1963年に確信した発行前の評価は、揺るぎない事実となり、世紀を超えて子どもの心を魅了しています。

『ぐりとぐら』60周年を目前にして、山脇百合子氏は2022年9月に、松居直氏は同年11月に他界されました。私たちはこれから、いつでも何度でも、ぐりとぐらに会えるのです。一時代を築いた絵本作家と編集者に敬意を表します。

文献

- 1) 松居直：絵本とは何か，日本エディタースクール出版部，東京，pp.284-290，1973.
- 2) 松居直：松居直と『こどものとも』～創刊号から149号まで，ミネルヴァ書房，京都，pp.283-286，2013.